

モンゴル語の長母音について----服部説の検証(2)

中村雅之

0. はじめに

モンゴル語における長母音の形成過程をめぐる服部四郎氏の仮説について、前号に引き続き検証を続けることにしたい。服部説の要点を再述しておく、以下の通りである。

服部氏はまず、服部(1939)において、13世紀初頭のモンゴル語には母音間の有声の口蓋垂(または軟口蓋)子音に破裂音([g][g])と弱摩擦音([ɣ])の2種があったと仮定し、後者が後に消失して長母音になったと論じた。次いで、服部(1959)においてその説をさらに発展させ、「しかしながら、語原的ならびに方言的音交替の次の諸例を見ると、これらの破裂音と弱摩擦音とは共に非常に古い1つの音素/\*g/に溯ると考えざるを得ない。」と述べて、その分岐の条件を以下のように、/\*g/に続く母音の長短に帰する説を唱えた。

/\*VgV/      → [\*VgV]      → /VgV/  
 /\*VgVV/     → [\*VɣV:]     → /VV/

これらの説のうち、服部(1939)に述べられた弱摩擦音説については、これを積極的に支持する根拠がなく、現代口語の長母音は13世紀までさかのぼっても長母音ないし二重母音であったと考えられる旨を、前稿において述べた。今回はさらに服部(1959)に述べられた、蒙古祖語における本来的な長母音についての仮説を検証する。なお今回も前稿と同様、bayaturの「-ɣ-」やdegereの「-g-」など、現代口語で発音されないウイグル文字(ならびにそれが表わすゼロ子音)を「-ɣ2-」と表記することがある。

1. 蒙古祖語の音素/\*g/

服部氏によれば、abayaにおける「-ɣ-」も、bayaturにおける「-ɣ2-」も、共に「非常に古い1つの音素/\*g/」にさかのぼるといふ。服部(1959)では「語原的ならびに方言的音交替の次の諸例を見ると」そのように考えざるを得ないとして、次の4組8例を挙げている。

/däär(ä)/ 《upside》  
 /dägdä-/ 《to fly up》  
 /boo-/ 《to wrap up》  
 /bogca/ 《a kind of bag》  
 /xuruu/ 《finger》(Khalkha)  
 /xurgan/ 《finger》(Buryat)  
 /'ägäm(ä)/ 《clavicle》(Khalkha)  
 /'ääm(ä)/ 《shoulder》(Bait)

服部氏はこれらの例に対して何の説明も加えていない。したがって、実のところこれらの例によって何を述べようとしたのかということはいささか不明確ではない。最初の1組では<上に>と<跳ねる>の語が並べられ、第2組では<包む>と<袋>の語が掲げられているが、これらはおそらく服部氏の言う「語原的」音交替の例に当たるのであろう。しかし、これらの語が同じ語源にさかのぼることが如何にして証明されるのであろうか。実際には、これらが語源を同じくすることを証明するためには、逆にこれらの語における「-ɣ(-g-)」と「-ɣ2-」(服部氏によ

るならば破裂音と弱摩擦音) が古くは同じ音素であったということをまず証明しなければならない。音対応に支えられない語源説はほとんど説得力を持たないであろう。(誤解を避けるために断っておくと、私は上の2組が語源的関連を持たないと言っているのではない。方法論を問題にしているのである。)

後半の2組についても、方言的音交替の例としてはいささか心もとない。第3組は「-γ2-」がハルハ方言で消失し、ブリヤート方言で/g/として現れるという意図であろうが、これは全く孤立的な例にすぎない。この例によって蒙古祖語における<指>がその語形に/\*-g-/を含む可能性が示されるとしても、それをハルハ方言で長母音を含む他の全ての語に一般化することは妥当ではない。最後の第4組も同様である。加えて、このような孤立的な例だけでは、現代の方言形が文語の綴りに影響されて生まれた新しい形式である可能性を排除できない。例えば、ハルハ方言形 тэргүүн<頭>を、小沢重男(1984: 25頁)は文語 terigün からの借用形と見なしている(口語としては тэргүүн が期待される)。

上の4組8例に続いて、服部氏は「もし我々が、この/\*-g-/の仮説を受け入れるならば、母音間の同じ/g/が何故に破裂音と弱摩擦音とに分岐したかを説明しなければならない。」として、自らの長母音説を縷々主張している。しかし、まさに「この/\*-g-/の仮説を受け入れる」かどうか大きな問題なのであり、この部分にはさらに慎重な説明が必要となろう。

## 2. /\*g/の消失---中期モンゴル語資料による内的再建

前稿に述べたように、現代口語の長母音は中期モンゴル語の長母音および二重母音にさかのぼる。したがって長母音の形成過程の問題は、換言すれば、中期モンゴル語の長母音および二重母音が如何にして形成されたかという問題にほかならない。

中期モンゴル語の二重母音の一部が、/\*g/~//\*g/ (服部氏は両者を区別せずに/\*g/とする)の消失によって形成されたことは、次のような名詞複数形の内的再建によって明白である。

(以下の語例に付された【碑】はパспа文字碑文、【秘】は元朝秘史の漢字音訳、《 》はその傍訳を示す。)

/čerig/ ~ /čeriüd/ <\*čerig-üd

【碑】 č'erig<軍>、č'eri·udun<軍(複数)の>

【秘】 扯<sup>声</sup>里克《軍》、扯<sup>声</sup>里兀惕《軍毎》

/aimag/ ~ /aimaud/ <\*aimag-ud

【碑】 ayimaq<アイマク>、ayima·udun<アイマク(複数)の>

【秘】 阿亦馬黒《部落》、阿亦馬兀蒼察《部落毎的行》

/jarlig/ ~ /jarliud/ <\*jarlig-ud

【碑】 jarliq<聖旨>、jarli·udun<聖旨(複数)の>

/kešig/ ~ /kešiüd/ <kešig-üd

【秘】 客失克《班》<宿直>、客失兀惕《班毎》

中期モンゴル語において、語幹末に「-γ(-g)」を有する名詞群は複数形語尾「-ud(-üd)」が接続する場合に語幹末子音を失っている。名詞の単数形と複数形とが「同じ語源」に由来することは自明であるから、この場合にはより古い段階から中期モンゴル語に至るまでの間に、「-γ(-g)」が消失したものと想定できる。本稿の表記に即して言えば、「-γ2-」の少なくとも一部分は[g]~/[g]にさかのぼる。ここに至って、結局、服部氏とほぼ同じ結論を得たことになる。

なお、これらの複数形はその後、単数形への類推(?)によって、再び「-γ(-g-)」が発音されるようになり、現代に至っている（例えば、ハルハモンゴル語で<軍(複数)>は **цэргүүд**）。しかし、現代に受け継がれなかったとはいえ、母音間で古い/\*-g-/の一部が消失したことは認めざるをえない。残念ながら私自身はその分岐的条件を示すことができないが、服部説にも賛同しかねる点がある。以下、服部氏の長母音説を検証してみたい。

### 3. 長母音の前で弱化は生じるか？

服部氏によれば、蒙古祖語にすでに長母音が存在したという。その長母音が直前の子音を弱化させ、さらに消失させて、その結果として現代の長母音が形成されたのだという。長母音の存在が長母音を形成したという、禪問答にも似たこの仮説に対して、正面切っでの反論があったということを寡聞にして知らない。しかし私はこの仮説について、素朴にして本質的な疑問を抱くものである。

服部氏の表現によれば、「第2音節およびそれ以後の音節における長母音は、同じ位置における短母音よりも、強く且つはっきりと発音されたので、それに直接先行する/\*-g-/を弱化せしめたのであろう」ということである。それを図式化したのが、

$$\begin{aligned} / * V g V / & \rightarrow [ * V g V ] \rightarrow / V g V / \\ / * V g V V / & \rightarrow [ * V \text{ɛ} V : ] \rightarrow / V V / \end{aligned}$$

であり、その語例として、以下の8例を挙げている。

Proto-Mongolian		Modern Mongolian
/*' abaga/	→	/' abaga/ 《uncle》
/*bagaatur/	→	/baatar(a)/ 《hero》
/*dägäärä/	→	/däär(ä)/ 《upside》
/*dägdä-/	→	/dägdä-/ 《to fly up》
/*kuruguun/	→	/xuruu/ 《finger》 (Khalkha)
/*kurugun/	→	/xurgan/ 《finger》 (Buryat)
/*' ägäm/	→	/' ägämä(ä)/ 《clavicle》 (Khalkha)
/*' ägääm/	→	/' ääm(ä)/ 《shoulder》 (Bait)

祖語の段階において、なぜ一つの語に/\*kuruguun/と/\*kurugun/のような2つの形式が想定されているのかということも大いなる疑問であるが、今その問題は措く。より本質的な問題は、「強く且つはっきりと発音された」長母音が、なぜ先行する子音を弱化させるのか、その音声学的な根拠はどこにあるのかということである。

服部氏によれば、本来の長母音は先行する/\*-g-/を脱落させるほか、/\*-k-/を規則的に有声化するという（/\*dakaa-/ > /daga-/など）。

現代英語、とりわけアメリカ英語において、「t」がしばしば弱化(有声化)することはよく知られているが（「water」）、強勢のある母音の前では弱化は生じない（「eternal」）。現代中国語において、軽声(=弱化)音節の子音は有声化する傾向が顕著であるが（「wō de」 「chI ba」）、非軽声音節ではそれほど顕著ではない。その他の言語においても、子音の弱化は弱い母音に隣接する環境で生じるのが普通である。強い母音と隣接することを条件として弱化が生じるという服部氏の説明は、言語一般の状況と照らして考えるとき、十分な説得力を持つものとは見なし難い。

#### 4. 「ヴェルネルの法則」の解釈

服部氏の長母音説がウラジミルツォフの第2強勢説を受け継いだものであることは、服部(1959)の次の記述から明らかである。(以下のa等は第1強勢、ā等は第2強勢を示す。)

Vladimircov 教授(1929, *Sravnitel' naya Grammatika*)は、この分岐的音変化を、古期蒙古語におけるアクセントの相違を仮定することにより説明しようとした。たとえば、

Ancient Mongolian			Khalkha
úlayān	《red》	→ úlaān	→ /'ulaan/
qálayūn	《hot》	→ qálaūn	→ /'xaluun/

これに反し、

únayan	《slave》		→ /'unagan/
nīčügün	《naked》		→ /nüc(ä)gän/

(中略)

しかしながら、蒙古諸言語における強勢の音韻的に有意な対立の存在は、まだ報告されていない。これに反し、すべての蒙古語諸方言・諸言語は短母音と長母音との音韻的対立を持っている。故に、問題の音連続の分岐的発達の原因は/\*-g-/の直後に来る母音の長さの音韻的相違である蓋然性の方が大きいと考えられる。

このように、第2強勢の直前の子音が弱化・消失するというウラジミルツォフの着想を継承しつつ、音韻的対立を考慮して第2強勢の位置に長母音を想定したのが、服部氏の長母音説である。しかし、その長母音は「強く且つはつきりと発音された」と説明されているから、ウラジミルツォフの第2強勢説と本質的な違いはない。要するに、強い母音の直前の子音が弱化したという仮定である。

それでは、強勢の位置と子音の弱化を関連付けるウラジミルツォフの発想はどこから来たのであろうか。それはおそらく1877年に発表されたいわゆる「ヴェルネルの法則」ではないかと思われる。ウラジミルツォフはそのヴェルネルの法則を不正確に(あるいは都合よく)理解して、モンゴル語に適用したのではないか、というのが私の推測である。

ヴェルネルの法則は「グリムの法則」の例外を極めて明快に説明したものであるが、その理解および記述の方法には、言語学の概説書や論文においてもかなりの混乱が見られる。今、最小限の説明のみをするならば、印欧祖語における[p, t, k]はグリムの法則により、ゲルマン語では通常[f, θ, x]となるが、少なからず[β, ð, γ] (文字上はb, d, gなど)となる例外がある(ex. サンスクリット語 pi<sup>h</sup>tā, ゴート語 fa<sup>h</sup>dar<父>)。その分岐の条件を示したものがヴェルネルの法則である。

以下に、興津達朗(1976)によるヴェルネルの法則の説明を引用してみよう。

デンマーク人の Karl Verner(1846-1896)は、彼の論文“Eine Ausnahme der ersten Lautverschiebung”(An Exception to the First Consonant Shift)(1877)において、この不規則性の解明に成功した。彼は、子音とアクセントとの間の関連に着目して、つぎのような規則性を発見した：

(1)インド・ヨーロッパ語のアクセント(上例のサンスクリット語、ギリシャ語に残存している)が、無声閉鎖音の前に来ているときは、ゲルマン語においては、グリムの法則通りの子音変化が行われる(たとえば、サンスクリット語 bhrā<sup>h</sup>t ar>ゴート

語 brōþar ‘brother’)、(2)その後に来ているときには、上掲の例外が示すように、ゲルマン語においては、有声閉鎖音となる。

最後に「有声閉鎖音となる」と述べているのは、文字と音声を混同したもので、ヴェルネルの法則を記述する際にしばしば見られる誤謬である (cf. 上野誠治 2001)。しかしより重要な問題は、アクセントが子音の後にある時、ゲルマン語では有声化する、と説明している点である。このような理解から、アクセント (強勢) に先行する子音は弱化 (有声化) する、という公式が導き出されてしまう危険性は十分にある。比較言語学の理論を必須の素養としていた 20 世紀前半の言語学者には、アクセントと音変化の関連を初めて論じたヴェルネルの法則は当然よく知られているはずのものであったが、それだけに上のように単純化した形で刷り込まれることがあっても不思議ではない。

しかし、ヴェルネルの法則は本来そのように理解されるべきものではない。相良守峯(1950)における次の説明は、最も明快にこの法則の本質を言い当てている。

上記ゲルマン語子音推移によつて p, t, k (及び ph, th, kh) は f, þ, x となつたが、これらの無声摩擦音はアクセントのある音綴の尾音となつてゐる場合 (—f, —þ, —x) には、その強音に支へられて音をそのまま保持したが、それ以外の場合には息気が弱まつて有声閉鎖音 b, d, g となつた。

要するに、強勢は弱化を誘発する要因ではなく、阻害する要因である。常識的にして穏当な説明というべきであろう。したがって、第 2 強勢であるにせよ、長母音であるにせよ、強い母音が子音を弱化させるというウラジミルツォフや服部氏の論は、説得力を欠くものと言わざるを得ない。

## 5. いわゆる「b」と「ɣ」の交替

条件「～ならば」を表わす接辞として、ウイグル文字モンゴル語では「-basu(-besü)」と「-γasu(-gestü)」の両形がある。文字の上から言えば、「b」と「ɣ」の交替が見られるということになるが、ここでの「ɣ」は実は我々の「ɣ<sub>2</sub>」である。したがって、この交替はより厳密には、唇音要素 ([b]ないし[β]など) とゼロ子音との交替というべきものである。

パスパ文字碑文では、この接辞は通常「-·asu(-·esu)」であるが、わずかながら「-basu」と記す資料が存在する。『元朝秘史』の漢字音訳では、巻 1・巻 2 で主に「巴速 basu(別速 besu)」、巻 3 以降で主に「阿速 asu(額速 esu)」という大まかな書き分けがある。

このような唇音とゼロの交替はほかにも多数見られるから、長母音および二重母音の形成には、唇音要素の消失も関わっていると考えることができる。

ウラジミルツォフ(Владимирцов 1929)は、蒙古祖語に/\*b/とは別に両唇摩擦音の/\*β/ないし/\*w/を想定し、母音間で (なおかつ第 2 強勢の前で) \*w>ɣ>ゼロという変化が起こって長母音になったとした。

服部(1959)では、[VbV:]>[VβV:]>[VɣV:]>[V'V:]>[V:]という変化を想定している。祖語の段階に/\*β/ないし/\*w/を認めない点を除けば、ウラジミルツォフとほぼ同じである。

ウラジミルツォフの「ɣ」や服部氏の「β」はウイグル文字表記の「-ɣ<sub>2</sub>-」を解釈するためのものであるが、この表記がゼロ子音であるという私の解釈に立てば、母音間で「β>ゼロ」という変化が起こったに過ぎないということになる。

## 6. 日本語/\*p/との類似

服部氏は/\*β/が/\*b/にさかのぼると仮定し、その分岐的条件を示したわけであるが、/\*β/が/\*b/にさかのぼると考えるべき積極的な根拠が示されているわけではない。/\*b/>/\*β/という変化を想定することが、先行子音を弱化するという服部氏の長母音説にとって都合がよかったに過ぎない。/\*β/は前述の「-basu」などいくつかの例を除いて、中期モンゴル語の段階までに全て消失したと考えられるので、この/\*β/それ自体が後に長母音を形成する条件になったと考えてよい。

なお、理論的には、この/\*β/がさらに古く/\*p/にさかのぼる可能性も考えられる。中期モンゴル語はその体系において、有声音/\*b/に対応する無声音/\*p/を欠くが、ちょうどその状況は現代日本語に似ている。日本語では、語頭で/\*p/>/φ/>/h/、語中で/\*p/>/φ/>/w/>ゼロ（母音-aの前でのみ/w/）という変化を経て、現在の状況に至っているが、それと同様にモンゴル語においては、語頭で/\*p/>/\*φ/>/h/となり、母音間で/\*p/>/\*φ/>/\*β/>ゼロ（母音-a/-eの前でまれに/β/）となって中期モンゴル語に至ったという想定が可能である。ただし、これは今のところ純粋に理論的な可能性にとどまる。

## 7. まとめ

服部氏の本来的長母音説（およびその基になったウラジミルツォフの第2強勢説）では、/\*g/～/\*g/の一部が消失した条件と、/\*β/の消失した条件を同一のものとして見なしたわけであるが、本来必ずしもその必要はない。同一の音声環境を設定することには理論上の美しさはあるが、事実だけを見るならば、その2つは切り離して考えて差し支えない。

母音間の/\*β/は全て後に長母音化する。一方、母音間の/\*g/～/\*g/については、消失して長母音化するものと、消失しないものがあり、その分岐の条件が解明される必要がある。本稿でその部分を明らかにできないのは遺憾であるが、これまで漠然と容認されてきた服部氏の本来的長母音説に理論的な不備があることを示し得たならば幸いである。

### <参考文献>

上野誠治(2001)「ヴェルネルの法則の記述に関して」『北海学園大学人文論集』第20号

興津達朗(1976)『言語学史』（英語学大系・第14巻、大修館）

小沢重男(1984)『元朝秘史全訳(上)』（風間書房）

相良守峯(1950)『ドイツ語学概論』（研究社）

服部四郎(1939)「蒙古語文語の起源について」（『服部四郎論文集』1所収、三省堂、1986）

服部四郎(1959)「蒙古祖語の母音の長さ」（『服部四郎論文集』3所収、三省堂、1989）

Владимирцов(1929) *Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия: Введение и фонетика*, Ленинград